

〈第一回〉

政治学科から史学科へ

山口 えり

私は、現在、日本古代史を専門として学んでいます。大学一年生の時には文学部ではなく、同じ早稲田でも政治経済学部政治学科の学生でした。その頃の私は、専門の勉強にも興味をもてず、サークル活動中心の日々を送っていました。そんな私がなぜ今、歴史学の最先端の研究にふれる事のできる場にいるのか――振り返ると、幼い頃をアメリカで過ごしたことによる影響と感じます。

小学生の頃に向こうで身につけた、資本主義こそ正義という思想が真実であるかのように、帰国後にはベルリンの壁の崩壊、ソ連の解体、中国の経済政策の転換、という一連の事件が起きました。その一方で、正義の国であると思っていたアメリカが始めた湾岸戦争については懐疑的にならざる

を得ませんでした。こうした様々な政策は何に基づいているのか、その仕組みを学びたいと思い、高校三年生の時には政治学や国際関係という分野に進むことに決めました。

そして、政経学部での大学生活が始まりました。そんな中、転機になったのはアメリカのロビイストに関する講義を受けたことです。一部の人々の利益を代表するロビイストの存在は、アメリカは平等だと教え込まれてきた私には意外な事実でした。そこで、弱者の立場を代表する存在はないのかという点に目を向けると、女性や黒人については講義で触れられたものの、アメリカンインディアン等の少数民族については触れられませんでした。

アメリカンインディアンは、アメリカでは native Americans と呼ばれ、直訳すると「土着の、先住の」アメリカ人となります。先住民族であった彼らが現在のアメリカ合衆国が形成される過程で衰退していった過程を辿るうち、私はふと考えました。

では日本はどうなのかと。私は日本人なのに日本の成り立ちを知らないことに気づいたのです。

また、政経での卒論ゼミが政治思想を扱っており、そこで丸山真男について学んだことも、私を日本史へと向かわせる原因の一つになったと思います。丸山真男は日本の戦後を代表する政治学者・政治思想家です。彼は日本の政治的思考様式に基本的な型を見いだそうとし、それを「原型」ないし「古層」等と呼ぶのですが、国家や民族の内面に時代を経ても在り続ける不変なものについて論じています。丸山真男は倫理意識・歴史意識・政治意識という三つの観点から「原型」を論じていますが、私はその内の政治意識の原型に興味を持ちました。

日本においては、統治権の帰属者（天皇の正統性の所在）と実質的な権力行使者（政治決定の所在）が分離していて、権威と権力との一種の二重統治が行われていたというのが丸山の原型論です。しかしそこ

では、天皇の正統性は何に由来するのか、なぜ天皇の権威は保持され続けるのか、という点については説明されていないのでは、という疑問にぶつかりました。

政治決定の主体は、例えば幕府であったり、内閣であったりと移り変わっていきませんが、権威を代表する天皇は古代から変わらずあり続けています。王や皇帝のいた国はあっても、いわゆる万世一系という天皇家のような存在をもつ国はなかなか見当たりません。私は、天皇制が確立された日本の古代史、天皇制の背景にある思想を学ぼうと決意し、今の師である新川先生に日本の古代史を学びたい、という手紙を書きました。そしてまもなく先生からのお返事を頂き、私の日本史への道が開かれました。

その後、政経学部を卒業すると同時に第一文学部の学士入学試験を受験して三年生に編入し、念願の日本史学専修の学生となりました。二年後には修士課程に進学し、今年度からは博士課程に在籍している次第です。

ですが、歴史学を志してからも決して順調な道を歩んだ訳ではありませんでした。そのような辛い時に励まして下さったのは先生方であり、諸先輩方や同期のみんなでした。違う分野から来た私をも暖かく受け入れてもらえる環境が日本史学専修にあるのも、私が今でも大学院にいられる理由の一つでしょう。

「歴史を学ぶ意義はない」という人もいますが、他分野から来た私はそんなことはないと確信しています。歴史学というと堅いイメージがありますが、とても身近なテーマをも包含する幅広い学問です。何かについて知りたいと思った時、必ずそこにいたるまでの歴史があります。そしてその歴史について論理的に考えてみるか否かでは、得られるものに大きな違いが生じるでしょう。

日本史の先生方の研究室や日本史学専修室は第二研究棟の六階にあります。また、古代・中世・近世・近現代の時代ごとに分かれて三者協という勉強会をやっています。

すでに参加されている学部生の方もいらっしゃると思います。ご興味・ご関心があれば一度覗いてみてください。

生命の樹

——東南アジア史への招待

青木 葉子

私は現在東洋史の博士課程で東南アジア史を学んでいる。もともとワヤン（影絵芝居）や、イカットという織物を通じてインドネシアに関心を持っていたが、インドネシアについてはほとんど何も知らなかった。そんな私が十年ほど前に突然、大学に入りなおし、東南アジア、とくにインドネシアについて学ぼうと決心したのは、その当時東南アジアの経済成長がめざましく、有望そうに見え、転職するなら東南アジアに関わる仕事をすべきだ、と私にしては目先のきいた（？）動機からだった。

第二文学部受験を決めた年にたまたま「花宇宙―生命樹」と銘打ったアジアの染